

國學院大學學術情報リポジトリ

アイヌ文化における献酒儀礼の考古学的研究：
出土木製品からみる和産物の移入とその影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 香, Shimizu, Kaori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002436

本論文は、北海道のアイヌ文化期（中・近世併行期）において、祭祀・儀礼具としてアイヌ民族によって製作された「イクパスイ（捧酒箸）」と、和産物である漆器類を用いて行われる献酒儀礼の成立とその変遷を考察したものである。

「イクパスイ（捧酒箸）」ならびに祭祀・儀礼具や副葬品、あるいは食膳具としても使用された「和産物」である漆器の移入時期と普及について考古学的に検討し、絵画および文献史料、民具資料を用いて総合的に分析することで、儀礼の成立時期を推測した。

擦文からアイヌ文化への移行期には、生活様式や物質文化における、転換や断絶、変容といった現象が認められ、その要因としては主に本州から移入した和産物を中心とした物質文化の影響が指摘されている。

石狩低地帯における出土木製品では、擦文後期後半（12世紀～13世紀）には、移入樹種が確認されるようになり、17世紀以降にはアイヌ墓の副葬品として定着している漆器を含む、移入品の出土事例が急激に増加、普及している状況が認められる。

擦文文化期の木製品は、アイヌ民具の中に類例が認められることが以前から指摘され、木製容器の組成などから、祭祀や儀礼の継続性が推測されている。しかし北海道は先史時代より、周辺地域から様々な影響を受けており、物質文化には古くから移入品が認められることから、今日において自家製品であると判断される資料においても、その祖型や起源を辿ることは難しく、様々な要素を慎重に判断していく必要がある。

アイヌ文化期の出土木製品には、日常生活に欠かすことのできない生活用具および祭祀・儀礼具として、アイヌ民族によって製作された自家製品と、周辺地域との交流・交易によって入手し、副葬品および祭祀・儀礼具として、そして威信財ともなった漆器類、酒や調味料などの容器である曲物・結物容器といった移入品が確認されている。

また北海道の自然植生は、道南と石狩低地帯を挟んだ道東・道北で異なることから、移入品の指標として、自家製品および和産物として分類した「器種」に加えて、自生および移入樹種を用いた分析を行った。

序論として、第1章では本論の目的と課題および論文の構成、第2章ではアイヌ文化の祭祀・儀礼について、文献史料・民具資料による「送り儀礼」「献酒儀礼」「民具資料」の概説、擦文・オホーツク文化期・アイヌ文化期の出土資料と民族事例の対応関係、第3章では、本州および道南から、石狩低地帯へ移入したと考えられる木製品について提示した。

本論では、献酒儀礼の物質文化に関連する事柄を検討した。

第4章では「イクパスイ（捧酒箸）」・「～状製品」とした類似資料を含む、10世紀中頃から18世紀前半の資料を集成、その変遷を示し、特徴的である線刻・文様を民具資料と比較した。さらに石狩低地帯に位置する擦文・アイヌ文化期の遺跡における木製品の樹種選択について、文献史料や伝承、

民具資料と検討した。その結果、イクパスイ（捧酒箸）と漆碗を使用した献酒儀礼が13～14世紀頃には成立している可能性が高いことを示した。

第5章では、献酒儀礼に用いられる漆製品を検討した。擦文・アイヌ文化期の出土漆製品を集成し、その出現と普及について分析した。その結果、擦文文化期には漆塗りの鞘を持つ刀剣類および碗類が少数認められる。13世紀後半以降には道南の館跡や交易港付近、石狩低地帯のアイヌ墓に漆碗が副葬されることを確認し、17世紀以降は、河川流域や沿岸部、離島においても副葬品として出土することから漆製品、中でも漆碗の普及を明らかにした。また、漆塗り挽物を対象とした樹種選択、東北地方および江戸遺跡の出土資料との比較により、揃い碗（壺碗・平碗）の欠如、副葬品における東北系箔碗の出土率の高さという、アイヌ文化期の特徴を指摘した。

第6章では、石狩低地帯の低湿地遺跡から出土した擦文からアイヌ文化期の木製品における「移入品（和産物）」の集成から、器種と樹種による分析を行った。その結果、擦文前期にはスギやアスナロ（ヒノキアスナロ）といった、移入樹種が確認されるようになり、擦文後期から中世にかけてこれらの比率が急増している状況を明らかにした。なお、移入品である漆製品が17世紀以降に広域に普及していることから、移入樹種についても連動している状況を確認した。

第7章では、『入北記』（1857〔安政4〕年に函館奉行の蝦夷地調査に同行した玉蟲佐太夫によって「場所」におけるアイヌの雇用条件や産物の買取価格、和産物のアイヌへの売価などが記された資料）を中心とした、18・19世紀代の文献記録における交易品目を検討した。

各場所において当時のアイヌ社会に移入した和産物の品目と価格を分析した結果、19世紀代には米や酒、煙草といった日常の製品に加えて、蒔絵の漆碗や耳盥・角盥といった高価な漆器類が入手可能であることを確認し、「イクハシ」と記載される品目について、伝世品にみられる漆による加飾のみが施された、和産物としてのイクパスイ（捧酒箸）との推測から、アイヌ民族の自家製品が和産物へと置き換わっていく現象の一つとして捉えた。

結論として、第8章では、各章での考察の結果を要約したうえで、献酒儀礼の成立とその要因について、総合的な考察を行った。

副葬品という観点では、オニキシベ2遺跡（勇払郡厚真町）1号墓（13世紀頃）に副葬された「蝦夷拵え」の太刀、および鎌倉幕府によって製作・管理が行われたと推測される「スタンプ文」の漆器の存在がある。イクパスイ（捧酒箸）とトゥキ（台盃）を遡ることは現在のところ困難であるが、「蝦夷刀」や漆碗をはじめとする漆器の副葬がこの1号墓で認められることは、献酒儀礼に用いられる用具、特にトゥキ（台盃）の使用時期とも関連していると推測できる。

また、文献史料によれば、献酒儀礼の形式は16世紀末には成立しており、オニキシベ2遺跡にみる副葬品は、一部が近世に引き継がれていることから、献酒儀礼についても同様の観念として13世紀頃まで遡及する可能性がある。

本州からの移入品である、須恵器および鉄製品における物流という観点から、10～11世紀にはすで

に東北地方北部（青森）を主体とする地域からの物流・交易の拠点的地域として、日本海ルートでは余市周辺および石狩低地帯、太平洋ルートでは厚真周辺、12～14世紀における陶磁器や鉄製品、漆器の分布では、海岸や河川河口域に集中していく状況が示されている。なお、12世紀段階において厚真、余市、上ノ国といった河川河口では、交易拠点としての役割による本州和人の進出という可能性、12世紀では平泉、13世紀では鎌倉幕府との関連が考えられる。

10～11世紀にはすでに東北地方北部（青森）を主体とする地域からの移入品が認められ、12世紀には、厚真町、余市、上ノ国において、平泉や鎌倉幕府からの和人の進出を推測できる資料、中世アイヌ墓の副葬品には、本州および大陸両方の移入品があり、アイヌ民族の物質文化においては、周辺地域からの影響があったことを推測させる事例が数多く認められる。

結論として13～14世紀頃に成立した可能性が高いことを提示した献酒儀礼について、擦文前期のイクパスイ（捧酒箸）状製品および漆椀が数点あり、10世紀前後のイクパスイ（捧酒箸）と類似資料が確認されているユカンボシC15遺跡、美々8遺跡（現在の千歳市周辺）では、その成立について10世紀前後まで遡る可能性があることを指摘した。

第9章では、展望と課題として、イクパスイ（捧酒箸）を含めた木製品が、主に石狩低地帯から出土しているという資料の制約があり、この結論がアイヌ文化の一地域の様相として位置付けられること、今後の課題としては、出土資料が少ない道北、道東のオホーツク文化期と擦文・アイヌ文化期、和産物を含めた木製品の特徴における比較研究、伝世品であるアイヌ民具、文献・絵画史料、伝承記録の調査をさらに進める必要があることを示した。

主要参考文献

- アイヌ文化保存対策協議会 1969『アイヌ民族誌』第一法規出版
- アイヌ民族博物館 1993『アイヌ文化の基礎知識』草風館
- アイヌ文化振興・研究推進機構 2000『アイヌ民族に関する指導資料』
- 秋野茂樹 2006「アイヌの霊送り儀礼と場所請負制」『近世地域誌フォーラム1 列島史の南と北』吉川弘文館、190-215頁
- 浅倉有子 2010「蝦夷地における漆器の流通と使途—浄法寺から平取へ—」『都市と城館の中世』高志書院、175-198頁
- 網野善彦・石井 進(編) 1995『蝦夷の世界と北方交易』新人物往来社
- 伊東隆夫・山田昌久(編) 2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社
- 乾 芳宏 2007「近世アイヌ墓と出土漆器について」『列島の考古学Ⅱ—渡辺誠先生古稀記念論文集—』渡辺誠先生古稀記念論文集刊行会、1-12頁
- 犬飼哲夫・名取武光 1969「イオマンテ（くま送り）」『アイヌ民族誌』アイヌ文化保存対策協議会、第一法規出版、549-576頁
- 宇田川 洋 1983「擦文社会の木製品の位置づけ」『月刊考古学ジャーナル』No.213、ニュー・サイエンス社、4-7頁
- 宇田川 洋 1989『イオマンテの考古学』東京大学出版会

- 宇田川 洋 2001『アイヌ考古学研究・序論』北海道出版企画センター
- 宇田川 洋・豊原熙司 2004「V 送られたもの」『ものが語る歴史9 クマとフクロウのイオマンテーアイヌの民族考古学』、同成社、55-71 頁
- 宇田川 洋 2007『アイヌ葬送墓集成図』北海道出版企画センター
- 宇田川 洋 2007「考古学から探るクマ送りの起源」『ものが語る歴史シリーズ13 アイヌクマ送りの世界』同成社。90-111 頁
- 宇田川 洋 2010「アイヌ文化の地平ー物質文化からみえるものー」『比較考古学の新天地』同成社、699-708 頁
- 内田武志（編） 1969『菅江真澄随筆集』平凡社
- 内田祐一 2006「イクパスイの機能についての一考察」『アイヌ文化と北海道の中世社会』北海道出版企画センター、251-276 頁
- 榎森 進・小口雅史・澤登寛聡（編） 2008『エミシ・エゾ・アイヌ アイヌ文化の成立と変容ー交易と交流を中心として 上』岩田書院
- 榎森 進・小口雅史・澤登寛聡（編） 2008『北東アジアのなかのアイヌ世界 アイヌ文化の成立と変容ー交易と交流を中心として 下』岩田書院
- 大塚和義（編） 2003『北太平洋の先住民族と工芸』思文閣出版
- 海保嶺夫（編） 1983『中世蝦夷史料』三一書房
- 萱野 茂 1978『アイヌの民具』すずさわ書店
- 菊池徹夫・宇田川 洋（編） 2014『オホーツク海沿岸の遺跡とアイヌ文化』北海道出版企画センター
- 菊池勇夫 2013「第9章 持ち込まれる「日本」の神仏ー近世の松前・蝦夷地の場合」『アイヌと松前の政治文化論ー境界と民族』校倉書房、235-263 頁
- 北原次郎太 2014『アイヌの祭具 イナウの研究』北海道大学出版会
- 北野信彦 2005「第4章 アイヌ関連遺跡の近世出土漆器」『近世出土漆器の研究』吉川弘文館、304-331 頁
- 北野信彦 2005『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣出版
- 木村英明・本田優子（編） 2007『ものが語る歴史13 アイヌのクマ送りの世界』同成社
- 金田一京助・杉山寿栄男 1942『アイヌ藝術・木工篇』第一青年社
- 久保寺逸彦 2001『久保寺逸彦著作集1 アイヌの宗教と儀礼』草風館
- 河野広道 1931「墓標より見たるアイヌの諸系統」『蝦夷往来』第4号（『北方文化論 河野広道著作集I』、北海道出版企画センター、1971年、52-81 頁）
- 河野広道 1932「アイヌの一系統サルンクルについて」『人類学雑誌』47号第4号、日本人類学会（『北方文化論 河野広道著作集I』、北海道出版企画センター、1971年、96-110 頁）
- 河野広道 1933「アイヌのケケウシパシュイーアイヌのイナウの研究I」『人類学雑誌』48号第7号（『北方文化論 河野広道著作集I』、北海道出版企画センター、1971年、165-178 頁）
- 河野広道 1934 「アイヌのイナウシロシ（I）ーイナウの研究II」『人類学雑誌』、49巻第1号（『北方文化論 河野広道著作集I』、北海道出版企画センター、1971年、193-205 頁）

- 河野本道 1996『アイヌ史・概説』北海道出版企画センター
- 越田賢一郎 2003「北方社会の物質文化」『日本の時代史 19 蝦夷島と北方世界』吉川弘文館、90-125 頁
- 小谷凱宣（編） 1996『アイヌ文化の形成と変容』名古屋大学
- 古原敏弘 2002「アイヌ社会の漆器－民族例からみて－」『月刊考古学ジャーナル』No.489、ニュー・サイエンス社、25-27 頁
- 佐々木 馨 2001『アイヌと「日本」民族と宗教の北方史』山川出版社
- 佐々木史郎・古原敏弘・小谷凱宣 2008『北海道内の主要アイヌ資料の再検討』国立民族学博物館
- 佐々木利和 2001『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館、143-145 頁
- 佐々木利和 2004『アイヌ絵誌の研究』草風館
- 笹田朋孝 2013『北海道における鉄文化の考古学的研究－鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心として－』北海道出版企画センター、125-135 頁
- 佐藤孝雄 1998「クマ送りの民族考古学」『民族考古学序説』同成社、177-206 頁
- 佐藤孝雄 2004「熊送り」の源流」『新北海道の古代 3 擦文・アイヌ文化』北海道新聞社、154-169 頁
- 佐藤孝雄 2004「ヒグマの“送り”儀礼－起源をめぐる研究の現状と課題－」『ものが語る歴史 9 クマとフクロウのイオマンテ－アイヌの民族考古学－』同成社、91-110 頁
- 清水 香 2008「アイヌ文化の捧酒箸について－樹種選択を中心に－」『國學院雑誌』第 109 巻第 7 号、國學院大学、51-76 頁
- 清水 香 2009「擦文・アイヌ文化における木製品の刻みについて」『出土木器研究会論集 木・ひと・文化』出土木器研究会、290-304 頁
- 清水 香 2015「擦文・アイヌ文化期の出土木製品における移入品について」『北海道考古学』第 51 輯、北海道考古学会、57-76 頁
- 清水 香 2015「アイヌ文化期における漆塗碗の基礎的研究」『物質文化』第 95 号、物質文化研究会、103-134 頁
- 清水 香 2015「アイヌ文化の木製品」『季刊考古学』133 号、雄山閣出版、45-49 頁
- 清水 香・本多貴之 2016「アイヌ墓に副葬された東北系箔碗－考古学・文献資料・塗膜分析による基礎的研究－」日本考古学協会第 82 回総会研究発表要旨、222-223 頁
- ジョン・バチラー 1995『アイヌの伝承と民俗』青土社
- 菅江真澄（著）内田ハチ（編） 1989『菅江真澄民俗図絵 上・下』岩崎美術社
- 鈴木琢也 2006「第 2 章-古代北海道における物流経済」『アイヌ文化と北海道の中世社会』北海道出版企画センター、19-34 頁
- 鈴木琢也 2016「平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容」『歴史評論』No.795、校倉書房、16-27 頁
- 瀬川拓郎 2005『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2009「宝の王の誕生－アイヌの宝器「鍬形」の起源をめぐる型式学的検討－」『北海道考古学』第 45 輯、北海道考古学会、1-14 頁

- 関根達人 2003「アイヌ墓の副葬品」『物質文化』第76号、物質文化研究会、38-54頁
- 関根達人・佐藤里穂 2015「蝦夷刀の成立と変遷」『日本考古学』第39号、日本考古学協会、91-112頁
- 高倉新一郎（編） 1969『日本庶民生活史料集成』第4巻、三一書房
- 田口 尚 1994「アイヌ木器とその源流」『季刊考古学』第47号、雄山閣出版、66-70頁。
- 田口 尚 2002「中・近世アイヌ社会における漆器考古学の動向」『月刊考古学ジャーナル』No.489、ニュー・サイエンス社、12-15頁
- 谷本晃久 2008「場所請負制下のアイヌ交易の姿—幕末・維新期を事例にして—」『アイヌ交易の世界 第4回（アイヌ文化研究の今）』札幌大学ペリフェア・文化学研究所、25-35頁
- 玉蟲左太夫（著）稲葉一郎（解説） 1992『入北記：蝦夷地・樺太巡見日誌』北海道出版企画センター
- 田村俊之・小野哲也 2002「陸の民としてのアイヌ社会の漆器考古学 千歳市末広遺跡を中心に—」『月刊考古学ジャーナル』No.489、ニュー・サイエンス社、20-24頁
- 手塚 薫 2011『ものが語る歴史23 アイヌの民族考古学』同成社
- 仲田茂司 1999「東国中世の漆器」『考古学研究』第46巻第1号、考古学研究会、72-90頁
- 名取武光 1985「アイヌの有翼酒箸」『アイヌの花矢と有翼酒箸』六興出版、127-222頁
- 奈良智法 2015「アイヌ墓の成立」『厚真シンポジウム 遺跡が語るアイヌ文化の成立—11~14世紀の北海道と本州島—』厚真シンポジウム実行委員会、87-99頁
- 秦 憶麿（著）佐々木利和・谷澤尚一（研究解説） 1982『蝦夷島奇観 全』雄峰社
- 林 弥栄 1969『有用樹木図説（林木編）』誠文堂新光社
- 藤井誠二 2008「木製品：その分類基準と北海道における変遷の特徴」『北海道大学総合博物館研究報告』第4号、北海道大学総合博物館、9-132頁
- 藤本 強 1988『もう二つの日本文化』東京大学出版会。
- 北海道・東北史研究会（編） 1998『札幌シンポジウム「北からの日本史」場所請負制とアイヌ—近世蝦夷地史の構築をめざして—』北海道出版企画センター
- 北海道開拓記念館 2000『第50回特別展 先史文化と木の利用—遺跡からのメッセージ—』
- 松崎水穂 2008「和人地・上之国館跡 勝山館跡出土品に見るアイヌ文化」『エミシ・エゾ・アイヌ アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として [上]』岩田書院、335-376頁
- 前田 潮 2002『ものが語る歴史シリーズ7 オホーツクの考古学』同成社
- 三浦正人 2004「木・繊維製品」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館、206-242頁
- 三浦正人・田口 尚 2012「11章 北海道」『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社、133-146頁
- 簗島栄紀 2015『「もの」と交易の古代北方史』勉誠出版
- 山田昌久 1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史—」『植生史研究』特別第1号、植生史学会、1-23頁
- 四柳嘉章 2006『ものと人間の文化史 131-II 漆II』法政大学出版局